

『黒人王、白人王に謁見す——ある絵画のなかの大英帝国』

(山川出版社、2002年11月)

文学部教授 井野瀬 久美恵

ロンドン中心部、観光客でにぎわうトラファルガー広場近くにある国立肖像画美術館。その二階、ヴィクトリア時代の絵画を展示したフロアに、「イギリスの拡大と帝国」をテーマとする小部屋がある。その入り口に立った瞬間、目に飛び込んでくる一枚の絵画——タイトルを「イングランドの偉大さの秘密 (The Secret of England's Greatness)」という。1860年代初頭に制作されたこの絵には、ヴィクトリア女王がひざまずき黒人王に聖書を贈る様子が描かれている。1998年5月、ロンドン暮らしに馴れはじめたころの私は、ひと目でこの絵が好きになった。色づかいがとってもいい。それに、イギリス史を専門としている私には、描かれている人物が顔を見れば誰かわかることがとてもうれしかった。(なにしろここは、「肖像画」美術館、なのである！)

ところが、だ。そのなかに、正体を特定できない人物がひとりだけいた。ひざまずき、聖書に手をのぼそうとしている黒人王である。彼はいったいだれなのだろう？ どこから何を求めてイギリスにやってきたのだろうか。その顔つきと肌の色からは、おそらくサハラ砂漠以南の出身と思われるのだが。彼の国はどういうところで、そこにはどんな人たちがどんな暮らしをしているのだろうか。その後も、この絵をみるときに、正体不明の黒人王が私の心を揺さぶった。

そんな同じ年の秋、私は、1901年に設立されたアフリカ協会(現王立アフリカ協会)という団体の活動を調査しようと、ロンドン北部、コリンデイルにある大英図書館の分館、新聞図書館(Newspaper Library)のマイクロフィルム閲覧室に通いつめていた。新聞図書館には、イギリス国内で発行されたほぼすべての新聞、ならびに植民地で発行されたかなりの新聞がコレクションされており、当時の生々しい情報を知るのに欠かせない場所となっている。

その日も、私は、マイクロフィルムが行きつ戻りつするシャカシャカという音だけが響く静か

な閲覧室で、100年ほど前の新聞記事をゆっくり読み進めていた。そのとき、ある記事が私の目を釘付けにした。1904年5月30日午後、西アフリカから渡英し、時の国王エドワード7世に謁見したある黒人王がくりかえしたという、こんな話である。曰く、「ヴィクトリア女王が、亡き私の父に、イングランドの偉大さのシンボルとして聖書を贈った」 えっ？ヴィクトリア女王がこの黒人王の父に聖書を贈っていた？それも「イングランドの偉大さのシンボル」として...!

この瞬間、私のなかで、あの絵の黒人王と、1904年に渡英した西アフリカの黒人王が重なった。では、あの絵のなかの黒人王は、この彼の父なのか？どうやったらそれを証明できるだろうか？

悩んだあげく、私はまず、この黒人王の国現在のナイジェリア南西部、ヨルバという民族が作ったアベオクタという都市の周辺にキリスト教を伝えたイギリス国教会伝道協会の報告書を紐解いた。するとたしかに、1848年、黒人王の父がヴィクトリア女王から聖書を贈られたことが記録されていた。しかしながら、これでは、実際にあの絵が描かれるまでに15年ほどの年月が流れたことになる。15年間も構想を暖めつづけたのだろうか。そうでないとしたら、あの絵の画家は、1860年ごろ、「黒人王に聖書を贈るヴィクトリア女王」という構図のインスピレーションをどこから得たのだろうか？1860年前後の外交文書を漁ってみたが、黒人王が現実に渡英した記録は残っていない。だからこそ、この絵の構図がどうやってイメージされたのか、それが問題なのである。

1904年の新聞記事と1860年頃制作の絵画はどうすれば重なり、新しい物語を語ってくれるのだろうか。資料を求めて「歴史の旅」をつづける私の前に、しだいに、これまでとは異なる「大英帝国の形」が見えてきた。詳しくはぜひご一読あれ！